

一大分県竹田市柘刈出土縄文晩期カメ棺一

牧 尾 義 則

(I)

1972年3月、大分県竹田市大字戸上、字柘刈において、堆肥埋込み作業中一基のカメ棺が発見され、地元の大塚主氏により調査依頼があった。

遺跡は、阿蘇外輪熔岩台地の東側地帯の熊本、大分間国道57号線に沿った平坦な場所であった。西に阿蘇の雄姿を望み、北に九重連山、南に祖母、傾山がつらなり、風光絶佳の位置を占める。附近は、田頭遺跡（縄文晩期）など、広範な遺跡が存在する。また遺跡の北側を東西に走る小谷を挟んで、北東には柘刈遺跡の存する丘陵と平行に東に延びる丘陵があり、そのほぼ中央にネギノ遺跡が存在し、九州最初の縄文晩期カメ棺の出土地（1959賀川）がある。また、国道57号線の通称開拓17号地には縄文晩期Ⅱ式土器の有望遺跡があるなど、縄文終末期の遺跡が集合している。

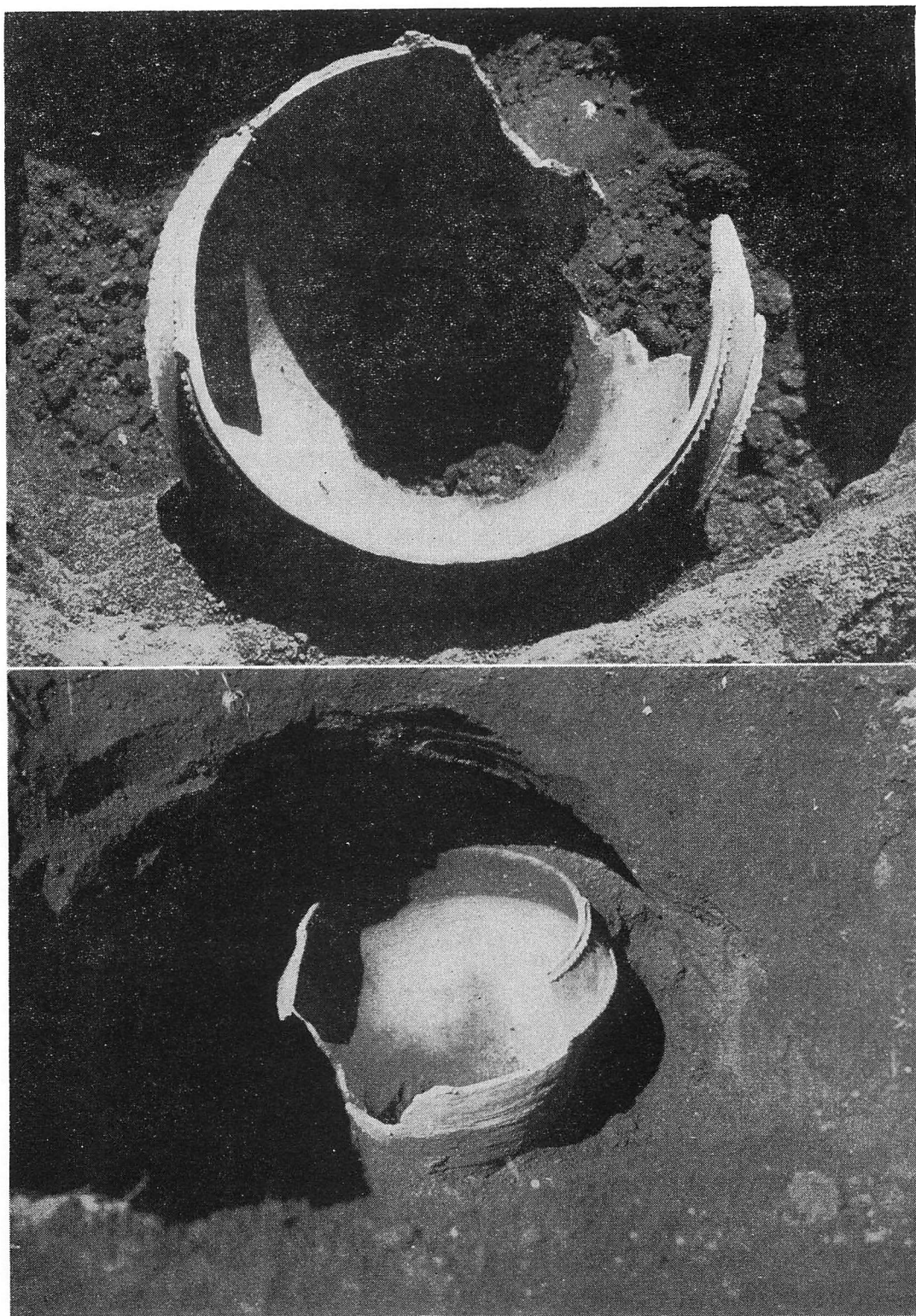
柘刈のカメ棺出土土地は、別府大学賀川光夫教授と、大塚主氏、筆者の3名で実施し、以下記する如き結果を得た。

調査時には、すでに、地表面から60cm程度掘り下げたところに直立単カメ棺の口縁部が露出していた。調査は、直立状態のカメ棺の埋葬状態を確認することであった。カメ棺埋葬の土壌は、直径1.5mのほぼ円形をなし、その断面形態は、逆三角形をなすものと推察された。墳の最下部は黒色の火山灰層下の黄色の粘土層（ローム状）まで掘り込みがみられた。土壌内には、河床礫が数個発見されていたが、これは棺としてのカメの安定に支え石、或は留め石としてもちいられたものと推理された。

(II)

カメ棺は、この土棺中にほぼ直立の状態で見つけられていた。カメは単独で上ガメをもちいていない。胴部から底部にかけて、大きく打ち欠き、底を抜いている。この底部を抜いて遺骸を安置する方法は、縄文晩期Ⅱ、Ⅲ式の間で可成り流行し、一種の埋葬形式をなす。長崎県島原市郊外礫石原遺跡（1969賀川）や大分県竹田市小高野遺跡の場合など同じ方法の単カメ棺で、合口の場合は前述のネギノ遺跡の場合がある。これらは、胴部から底部にかけて大きく打ち欠き、直立または斜めに埋葬する。礫石原の場合は、打ち欠いだ底部を口縁部の上に乗せるという興味深い方法であった。

さて、カメ棺の出土地の周辺には、同じような堆肥穴約10mの間に数個掘ってあったが他にカメ棺、又は土壌などの埋葬に関する遺物の存在はなかった。カメ棺は、これら堆肥穴の南側に位置した一つの場所であるため、このカメ棺が群墓をなす場合があるとすれば、多数の堆肥穴の南側一帯にあるものと推理される。



第1図 大分県竹田市柙刈出土カメ棺出土状態

## (Ⅲ)

カメ棺は縄文晩期Ⅲ式（山ノ寺式）のカメ形土器で、口縁部径80cm、高さ96cmで、肩部がく字形に屈折して、その部位に最大径があり、そこで96.5cmを算える。口縁部と肩部は、刻目凸帯を各々一条めぐらし、荒い貝殻条痕で、器面を調整する。底部は円盤形のハリ付け底となるものと推定されるが、出土しておらず明確をかく。口縁部の刻目凸帯には、貝殻による刻目が右方向から行われ一個所に刻目凸帯の終始部として集合されて、この部位がわずかに隆起する。肩部の屈折部は、土器整成時の輪積部で、そこに凸帯をめぐらして、刻目を施す。口縁部と同様である。

カメ棺の出土が、わずかに1基で、更に探索作業を行うことはしていないために、墓域の確認やカメ棺の出土状態をあるまじりをもって確認することはできなかった。しかし、カメ形土器の底部を抜いて棺とする例は他にも多くの数例があり、縄文晩期終末のカメ棺の底部破損の方法と、弥生式カメ棺の二次的穿孔の方法とに何らかの関連があるのではないかとする考えが生じ、ここに両者のカメ棺葬制に共通する問題の萌芽があったものと推察される。

柘刈遺跡の発掘で、縄文晩期のカメ棺が、大野川流域一帯に広く分布することが明かとなり、この地方での縄文晩期の葬制が一般的にカメを主体とすることが明かとなった。カメの大きさから考えて小児の埋葬が多いと思われるが、ネギノ遺跡や小高野遺跡の如く合せ口のカメ棺には、大人の埋葬も可能であったようである。このカメ棺の盛行は弥生式文化の前段的埋葬様式とみられる。

賀川光夫、(1959)九州における縄文晩期のカメ棺、「石器時代」5。

賀川光夫、(1969)縄文時代のカメ棺「考古学ジャーナル」34.35.37。